

編集デスク <11>

川端康成に「末期の眼」というエッセイがある。およそ川端康成論が書かれる際に、誰でもとりあげざるを得ない凄絶な文である。川端自身は、自分が語られる際に、いつでも「末期の眼」が引き合いに出されるのはいやだと言っているが、論者にとっては、川端康成を論ずる場合に、川端の本質をとらえ、それを語るに、この文を逸することはできないから、川端が好もうが、嫌おうが、おかまいなしに、引用せざるを得ない文である。

孤児として人となった川端は芸術家の血は病み弱められており、消えゆく残燭が、いまわの際に燃え上がったのが芸術家の生命だと信ずることを述べている。これはすでに悲劇であり、芸術家は一代にしてできるものではないことを語っている。川

端康成という、亜流を許さぬ芸術家も、そのようにして生み出されたものであろう。康成はもの心つく前に父母を失い、一人の姉をも早く失い、祖母を失い、祖父の手で育てられた。そのような天涯の孤児の感情が、川端文学の本質には流れている。それは、すでに亜流というものの存在を許さぬ環境である。

川端康成の目

長谷川 泉

康成の眼は、異様にぎょろりとして輝いている。無口であって、自からは語ることをしない。私が始めて康成に会ったのは、鎌倉の居宅であった。当時私は一高の生徒で白井健三郎や今は亡い松本彦良（東北大学教授）と共に訪れた。文芸部の委員として、この怖い先輩を訪問したのであったが、みずからは語りかけるこ

とをせず、私たちの語るのが聞いて、間に短言をはさむだけで、あとは終始無言、例の凝然たる瞳を据えてぎょろりと睨まれるのには閉口した。その眼光は、すべての外相を剝脱して、内奥を見透す光である。川端文学の神髄につらなる眼である。「末期の眼」のきびしさである。この恐るべき対面の雰囲気とを和らげてくれるものがあるとすれば、康成がいつくしんでいる小鳥たちの声だけであった。名作「禽獣」の世界である。そんなことを思い出しながら、私は「川端康成入門」（講談社版「現代日本文学全集」）を書いた。その文に接した人に、永久に忘れ得ない強烈な印象を与える文は、そう多くはない。「末期の眼」はそのような文である。そして、私もまた川端康成を語るのに「末期の眼」を逸することは不可能であった。

ういうことで批判が出てきているとしたら、これはもっともだと思うんですよ。だからナイチンゲール精神そのものを歴史というものの動きに即して考え直すことが必要だと思う。そうしてそうなったときに、そういうものを一つの職業倫理と言いますか、そういう観点から再編成するということが要求されているんじゃないんですか。これは昔の師範学校もそうです。固定したものに押しつけようとする。非常に便利だけれども、歴史の動きに即しないという面が出てきます。そうすると新しい指導理念というものが見つからないから、指導者の側もあるいは指導される側もとまどうということになってくるし、あるいはそれをただ利用しようとする、そういう面の弊害が出てくると思うんです。

三枝 いわゆるナイチンゲール誓詞なるものが教育勅語みたいになっちゃっているとすれば、そこに問題があるんじゃないですか。形式化されている。そうするとかえって内面のを失っちゃうことになるわけです。

岡部 奉仕の精神というものは大切だと思うんです。しかし同時に、それが低賃金でいい、あるいは肉体的な過労でかまわない、オーバー・ワークでかまわない、それと同意義じゃ遺憾だと思う。やっぱり人間として肉体的・精神的にゆとりがあると同時に、それがあつた上で、しかもなお奉仕の精神というものが考えられるわけなんです。それが簡単に言えば、新しいナイチン

ゲール精神になると思います。

<成長の時期によい肥料を>

司会 大学の場合と看護学校の場合とは違うんですが、個人が人間的に進歩あるいは成長を遂げようとするときに、先生の立場として、どのように援助なさっているのでしょうか。

岡部 これはその人自身が自分で成長する力を持っているということが前提条件になる。ちょうど作物なんかにある時期に肥料をある分量やったときに非常に成長する。それと同様に成長する時期に適当な分量の肥料をやるというようなことぐらいしかできないんじゃないですか、教師は。

三枝 僕は実際には商船大学の一般教養の文学をやっていました。それから現在静岡薬科大学の一般教養の文学、それから高等看護学校の一般教養をやっているわけです。みんな文科系じゃない。いずれも出たら何になるかということとははっきりしているわけです。それで私としては、船乗りさんのことも、薬のことも、また化学方程式もわからないわけです。（笑声）それでそういうことでは学生と何も直接関係はないわけですが講義する場合、文学について専門的な話をしても受け取る側にとって興味がないということはあるわけですね。ですからおもしろく話すことを求めるわけです。というのは商船大学なんかは男ばかりであり、看護学校の場合は女ばかり